イベントなどへの参加の際は手洗いやマスク着用などにご協力ください

いずみさの昔と今 第318回

「耕す～農業と馬と牛～」

5月21日㈯から約3ヵ月間にわたり行われる、歴史館いずみさの春季企画展「耕す・育てる・収穫する」に関連し、今号からは「耕す」「育てる」「収穫する」の3つのテーマに分けて紹介していきます。

第1回目は、「耕す」に焦点を当ててみていきます。まず初めに、「耕す」という言葉は、「田返す（たかえす）」が音変化していった言葉であり、その文字から読み取れるように、農作物が育ちやすいように田畑の土を掘り返すという意味です。現代においては、耕運機が普及しているため機械の力を用いて地を耕すことができますが、古くは鋤や鍬を用いたり、馬や牛といった動物の力を借りて行っていました。今回の企画展でも、多くの鋤や鍬が展示されています。その中でも今回は、動物の力を借りた農業についてみていきます。

昔の農業において牛や馬は重宝されており、その歴史は古く、中国では春秋戦国時代から、日本では鎌倉時代から農業に用いられていたといわれています。現在ではほとんど見ることの無くなった農業の光景ですが、どのような利点があったのでしょうか。一つは肥料です。農業において欠かせない堆肥は、動物の糞を使い作られるものが多いです。そのため、牛や馬の糞は農作物を育てるための肥料として大いに活躍していました。

2つ目は、牛や馬のパワーです。人間の何倍も大きな体を持つ牛や馬は、人力ではできない深さを掘り返すことができ、堅く固まった土を歩くことにより踏み砕くことができます。また、その作業能率も人間の5倍以上といわれており、このような点からも農業において重宝されていた理由が見て取れます。

農業で大活躍していた牛や馬ですが、関西では牛、関東では馬というように飼う動物が異なっていました。これはなぜなのでしょうか。その理由として、農業の形態の違いが挙げられます。関西では水田が多く、湿った土には牛の方が適していたため、牛を農業に用いていました。

一方、関東は畑作が多く、乾いた土には牛よりも馬が適していました。さらに関東は、山が少なく平野が広がっており、耕さなければならない土地が広かったため、作業効率の面からも牛よりも馬が用いられたと考えられます。

このように古くから人と暮らしていた牛や馬は、家族の一員のように大切にされてきました。また、神の使いや乗り物として多くとらえられていたことから、他の動物とはまた違う接し方をされていたことが窺えます。

現在では見ることが少ない農業の風景を、展示を通して感じてみるのはいかがでしょうか。

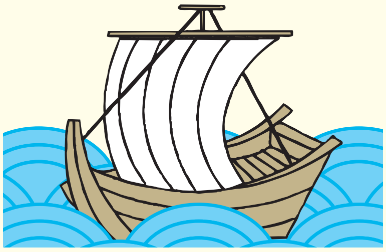
▶馬鍬（歴史館いずみさの所蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

JAPAN HERITAGE
日本遺産

日本遺産・北前船文化を巡る④

～旧佐野浦の町並み～



「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

北前船は、江戸時代の中頃から明治30年代にかけて、瀬戸内から日本海を往来した買積船でした。北前船は寄港地で安い品物を買い、高く売れる場所で売るという「商売」をしながら、大阪から東北・北海道を往復していました。米や瀬戸内でつくられた塩、刃物、綿、昆布などさまざまなものが、人々の手に渡りました。限られたエリアでしか手に入らなかったものが「動く総合商社」としての役割を果たしたことで、人々の生活をより豊かにしました。また、食料品だけでなく文化も一緒に運びました。北海道産の昆布を西日本に運んだことで和食の基礎を作り、船乗りが各地方で覚えた歌がそれぞれの地域に定着し、独自の民謡が出来ました。

▲「旧佐野浦の町並み」の名残りを今に残す泉佐野ふるさと町屋館（旧新川家住宅）

泉佐野には、豪商食野・唐金家の船主集落「旧佐野浦（佐野町場）」が今も残っています。例えば、旧佐野浦を現在でいうと佐野漁港周辺がそれにあたり、佐野町場の雰囲気は「泉佐野ふるさと町屋館（旧新川家住宅）」（市指定文化財）、「旧覚野兵蔵家蔵」（国登録文化財）、「大将軍湯」（国登録文化財）の建物のほか、迷路になった細い路地や水路、いびつな町並みを歩くと、江戸時代に泉州一にぎやかであった在郷町の名残りを肌で感じることができます。